

SONRISA

そんりさ

Vol.158



殺害された首長アレクサンデルが守ろうとした、リオブランコの町と山々=2ページ

コロンビア
和平の陰の暴力

- | | | |
|----|------------------------|-------------|
| 02 | コロンビア「和平」の陰で続く暴力 | …………柴田大輔 |
| 06 | メキシコ・ナルコ回廊 行方不明者家族 | …………山本昭代 |
| 10 | コンドル作戦の傷跡 | …………伊香祝子 |
| 14 | ラ米百景「ブラジル日系移民の凄惨な事件」 | …………伊高浩昭 |
| 16 | ペルー音楽「サーニャのアフロペルーの試み」 | ……水口良樹 |
| 12 | 『アステカ王国の生贄の祭祀一血・花・笑・戦』 | ……岩崎賢 |
| 18 | メキシコの食「鶏手羽元のシチュー」 | ……ミゲル・アクーニャ |
| 19 | ニュースクリップ | …………サザエ |

コロンビア 「和平」の陰で続く暴力

柴田大輔

内戦が半世紀を超えるコロンビアで8月24日、活動する国内最大の反政府ゲリラ・コロンビア革命軍（FARC）と政府間で歴史的な和平合意に至った。10月2日には、この合意を国民投票にかけ賛否を問う、その結果を受けて最終的な両者間の戦争終結となる。もう一つのゲリラ民族解放軍（ELN）と政府間の和平交渉も、エクアドルを舞台に開始されると昨年発表された。国内の、武装組織同士の戦闘が終結に向かっている。

しかし、「内戦終結」が大きな喜びとともに伝えられる陰で、先住民族指導者をはじめ、地域指導者、社会活動家に対する迫害が止まない。3月27日の全国紙エル・ティエンポに、2016年最初の3カ月間で全国28人の社会的指導者が暗殺されたとの記事が出た。それぞれ、人権、環境、違法開発など社会問題に取り組む地域リーダーたちだ。14年78件だった同殺害事件が、15年108件へ増加、16年は前年と同レベルで増加している。

特に先住民族への迫害が続く南部カウカ県では、麻薬取引や鉱物の違法採掘から利益を得る準軍事民兵組織と、民兵を利用し資源開発を進めたい企業が、社会的自立を求める先住民族社会を抑圧する。

70年代以降カウカ県では、先住民族自身が復権運動を組織的に続けてきた。私は彼らの活動を2007年から取材し続けてきた。カウカは、資本家、企業による大規模な農場が広がる平野部と、峻険な山々が連なるアンデス山地を地域に抱える。山岳地帯にはゲリラが活動し、平野部では資本家と結びつく民兵が活動してきた。農村は、両武装組織の間に立たされ、大きな犠牲を払ってきた。この内戦の只中で暮らしてきた先住民族がいる。

歴史の大きな節目となる今年、3月から5月初めにかけて現地を訪ねた。

1. 殺害されたヤナコナ民族の首長

今年3月2日、コロンビア南部カウカ県の中心都市ポパヤンで、同県ヤナコナ民族自治区リオ・ブランコの首長アレクサンデル氏が白昼、何者かに銃撃され死亡した。31歳の若きリーダーであった彼は、

ヤナコナの生活圏である高山地域の環境保護を主張してきた地域の中心人物だった。

リオ・ブランコを4月初めに訪ねた。標高4400mのソタラ火山を間近に見上げる小さな町。火山から吹き下ろす風が、昼でも体を冷やす。一帯には、約1500人のヤナコナ民族が暮らす。

アレクサンデルは以前、土地のコミュニティーラジオ局で記者を勤めてきた。昨年初め、自治区の副首長に就任し、昨年末の選挙で投票を得て、今年1月に晴れて首長に就任したばかりだった。

生前の彼を映した動画を、リオ・ブランコの住民が見せてくれた。地域の祭りの映像だった。賑やかに踊る大勢の男女の前で、ダンスミュージックを奏でるバンドでギターを弾く彼が映し出されていた。若さに溢れ、聡明で活発だった彼は、多くの人を惹きつける魅力を持っていたと聞いた。これから地域を牽引していくと周囲は期待した。彼が働いていたラジオ局が町の中心にある。その外壁に、彼を惜しむ人たちによって、彼の姿が大きく描かれていた＝写真。

まだ亡くなって日が浅いせいか、人々の口は重かった。アレクサンデルの後を継ぎ首長となった男性は、「彼は外部の力から土地と文化を守ろうとした。私たちは彼の意思を継がなければいけない」と話す。他の地域だが、数年前に地域を武装組織から自立させようと活動したリーダーが殺害された場所がある。残された人々の中から、「地域の中心となる人物は、小さな社会で生きる私たちにとって希望なのです。その彼がいなくなった。私たちの希望が消えてしまった」と重く語る人物がいた。暴力が人々に沈黙を強いていた。



2. 地域指導者への迫害と民兵組織

カウカでは、今年に入って先住民族へ圧力をかける事件が続いている。特に7月は、ナサ民族自治区トリビオの首長のもとに民兵組織アギラス・ネグラスから殺害予告が届いたのを始め、14日には、キリチャオ市でナサ民族2人が銃撃され死亡した。続く16日には、ラス・デリシアス先住民族自治区の指導者が、自宅へ押し入ってきた暗殺者に銃撃を受け重傷を負う。さらに17日、ウエジャス自治区で2人の先住民族が身元不明の人間に攻撃を受けている。カウカ県北部の先住民族協会ACINは一連の事件を受けて、「準軍事民兵組織の名で、脅迫文が出回っている」とコメントを発表し、先住民族が暮らす領域の安全確保を政府に要請した。

民兵組織は各地方の大土地所有者、麻薬組織がゲリラから自衛のために所有した傭兵が発端だった。その後、麻薬取引などを資金源に勢力を拡大し、全国組織・コロンビア自警軍連合（AUC）に成長した。対ゲリラ戦争を戦う政府軍と時に活動を共にしながら、現在の内戦の一翼を担った。2006年までに政府により解体されたが、形を変え今なお活動が続く。現在、大小少なくとも18以上の民兵組織が、全国32県のうち27県で活動していることが報告されている。

現在の民兵を政治学者アリエル・アリバ氏は全国紙エル・ティエンポ紙面で「誰でも雇うことができる傭兵」だと解説している。また、首都在住のビデオジャーナリスト、ブラディミル・サンチェス氏は「麻薬組織、企業からの資金援助を受ける違法武装組織である」と説明した。

3. 抑圧の歴史

広い豊穡な土地をもつカウカは、古くは牧畜、現在は製糖、バイオエタノール向けのサトウキビ栽培が企業により大規模に展開されている。この豊かな土地にスペインによる統治時代以前から「先住民族」が暮らしてきた。植民地期以降、彼らは入植者に土地を奪われ隷属的に扱われた歴史を持つ。特に19世紀後半から土地を奪われた人々が、自らの土地を地主から借り、借地代を払うため地主の農場で無



2016年4月9日、コロンビア全土で平和行進があった

賃金労働をさせられてきた。一部では1980年前後まで続いた隷属的環境の中で、人々の抵抗を地主は力で圧殺してきた。現在では農地としての豊かさだけでなく、採掘されている金をはじめ、銅や石炭などの豊富な地下資源が確認されている。

カウカでは、主に70年代から先住民族自身による復権運動が始まり、土地の回復を中心に据え現在へと続く。活発な運動を通して自治意識を高め、自らが主体となり生きる社会建設を着実に成し遂げようとしている。しかし、その土地が生み出す利益を得ようとする民兵、企業にとって、彼らの自治拡大は邪魔なものでしかない。「なぜ先住民族が民兵に狙われるのか？」という私の問いに、前出のビデオジャーナリスト・サンチェス氏は、「それは、先住民族が土地を守るからだ」と答えた。

3. 主権者としての先住民族

カウカで先住民族が復権運動の中心に位置付けるのが、「母なる大地の解放」と名付けられた土地を回復するための活動だ。私は2007年と10年、この活動に同行した。07年は、総勢1000人余りの先住民族が参加し、平地部に広がるサトウキビ農場を占拠した。はじめ参加者は二つの班に分かれ、一方が幹線道路を封鎖し活動を妨害する警官隊を制止し、もう一方が農場へと向かった。当時、私はナサ民族が多く暮らすハンバロ先住民族自治区に住み込み取材をしていた。参加者は、10代から年配者まで多岐にわたる普段は農業に従事する「普通」の住民たちだった。中には学校を休んで参加する10代前半の子どもがいた。現在まで繰り返されるこの活動では、警官隊との衝突により先住民族側に多数の負傷者、

時に死者が出ている。身の危険を覚悟する人々の情熱が、今も私の中で熱を持つ。農場では投石で抵抗する人々に、警官隊が催涙ガス弾を打ち込んだ。それでも先住民族は抵抗を続けながら農場のサトウキビを引き抜き、彼らを象徴するトウモロコシ、豆など伝統作物の種を1週間にわたり蒔き続け、土地の主権と自身の存在を示した。

近年は先住民族自治区内で、採掘権を持たない違法業者による金の採掘が問題になっている。土地の住民は川砂をさらう古くからの方法で砂金採取をしてきたが、重機を持ち込む外部の人間が、川の形が変わるほど土地を掘り返し作業を続けたため、河川が汚され森が荒れた。業者の背後には、金取引から資金を得る民兵、企業があるとされる。またカルドノ自治区では、区内に存在する天然資源採掘を求め、開発へ理解を求める文書が政府より送られてきた。それに対し、要求を拒否する自治区に民兵から脅迫が届いたことがある。

1991年制定のコロンビア憲法は、先住民族自治区内における土地の主権者として、民族自身による慣習法での統治を認めている。また、同憲法は「すべての地下資源は国家が所有する」と定義しているが、91年にコロンビア政府が批准した、先住民族の権利を示す国際労働機関（ILO）169号条約は、領域内での資源開発に際して政府には関係する民族との事前協議の必要性があることを示し、関係する民族は損害に対する公正な補償を受ける権利を持つと謳っている。また、土地の主権者である先住民族への強制移住を禁じている。この点からも、自治区内において住民の存在を敵視し、暴力で排除する姿勢は強く批判されなければならない。



07年、カウカ県北部のさとうきび農場を占拠するナサ民族。催涙ガス弾を撃ち込む警官隊に投石で抵抗する

4.誰のための「平和」か

今年4月、カウカ県の先住民族の間で、現在の和平交渉にどう向き合っていくかという集会が開かれた。登壇したナサ民族の女性指導者ルス・メリィ氏が怒りを込めて聴衆に語りかけた。

「政府は今も続く暴力をコントロールできず、その背景に責任を持たない。誰のための『平和』か」

内戦の要因に、大土地所有に象徴される拡大し続ける社会格差がある。「先住民族」と呼ばれる人々は、常にこの社会の端に置かれ続けてきた。

ルス・メリィ氏は演説で、さらにこう付け加えた。「ゲリラ、政府軍、民兵、そこで殺し合うのは私たちの息子たちだ。彼らが銃を向けるのも、私たち自身。紛争の原因は除かれないままここに存在し続けている」

武装組織を構成するメンバーは、農村出身者、都市の低所得者層に多いと聞く。そこには先住民族の若者たちも含まれる。私はコロンビアの農村で出会った子どもたちと、今ではよくインターネットを通してSNSで繋がり、彼らが日々アップする日常の写真を通して、今何をしているのか知る機会が多い。その中の、少なくない人たちが軍隊に入隊し、そこで撮影したと思われる写真をアップしていて驚くことがある。山間地のキャンプであろう場所で銃を持つ姿や、軍服で同僚と肩を組んでいるものなどだ。徴兵制があるコロンビアだが、先住民族は徴兵が免除される。写真で軍服をまとう彼らは、自らの意思で入隊したのだ。

また、私には以前から付き合いのある、ある先住民族の友人がいる。以前、22歳を迎えた彼と交わした会話が、彼らの生活を象徴していた。

彼はカウカ県のある先住民族自治区で生まれ育った。周囲と同じように、彼の家族も農業を主体として生活をしている。自給用に、根菜類やトウモロコシ、豆、さとうきびを栽培し、換金作物としてコーヒーを作る。コロンビアで最も収穫高が多いコーヒー産地の一つであるその地域だが、コーヒーだけで1年間家族を養っていくだけの収入にはならない。ここで重要なのが、麻薬原料としての違法作物だ。コカや大麻がある。これらを合わせて、コロンビアが定める最低賃金をわずかに上回る収入を得る。



⑤ コカを収穫する人々。大切な現金収入源となっている ⑥ コーヒーの苗を植える人々

友人は、大学で心理学を学び、人の心を癒したいという夢を持っていた。彼は一生懸命勉強し、大学に進学した。親類の援助を受けて学費と下宿代を賄っていたが、1年で金銭的な無理がでて仕送りが止まる。私が彼と会話を交わしたのは、彼が休学し実家に帰ってきてからだった。思うよういかない人生にイラつき、家族に対して心を閉ざしていた。

彼が言った。「ここにはコカしかない。1年間コカを摘んで、もしお金ができれば大学に戻りたい。弟は仕事がなくして軍隊に入ろうとしたんだ。でも、ゲリラが近くにいるここでは、家族に軍隊に行った奴がいると『裏切り者』って見られるかもしれない。母親が泣いて止めたよ」

コロンビアでは、内戦の沈静化により外国資本が増加し、「戦後」のさらなる経済発展が期待される。資源開発がそこに果たす期待は大きい。しかし、そこで語られる「戦後」の主体は、これまで同様この国を動かしてきた富と力を持つ一部の人々であり、彼らのための「平和」でしかない。社会的、

経済的にコロンビア社会の「辺境」に置かれてきた先住民族社会は、今も同じ位置にあり続けている。その状況を変えようと先住民族は、まさに、身を削り、血を流してきた。それでも、「経済的發展」を望む力を持つ人々によって描かれた未来は、彼らを中心に「發展」する「豊かな」社会でしかない。

ナサ民族の男性が私に話した。「私たちが守ろうとしているのは、私たちが生きるために必要な土地だけです。私にとっての『平和』とは、生まれ育ったこの土地で家族や友人たちと静かに暮らすこと」。これまでの歴史の中で、大きすぎる犠牲を払い続けてきた人々が求める平和の姿に、今の「平和」はどれだけ寄り添えるのか。

ただ、彼らは平和に対して受け身でいるわけではない。周りの状況が変わろうとも、これまで同様、活動し、発言し続けることで自分たちの価値観による生きやすい社会を作ろうとしている。

9月26日のサントス大統領とロドリゴ・ロンドニョFARC最高司令官による和平合意署名式を受けて実施された10月2日の国民投票で、和平合意反対派が賛成派を0.4%上回った。各国の代表者を招き、大々的に行われた直後の出来事に、衝撃が走った。

背景には、FARCに嫌悪感を抱く主に都市部の人々が、武装解除後の恩赦など、FARC兵士に対して寛容な合意内容に反発したことや、現大統領に反発する勢力によるネガティブキャンペーンが功を奏したとの見方がある。

和平合意後、コロンビア各地で、平和を求める人々による大規模な集会や行進が行われた。首都ボゴタの中心で、広場を埋め尽くす参加者が持つ蠟燭の明かりが夜空に駆け上る「queremos la paz(私たちは平和を欲する)」の大合唱は、パソコンの画面越しでしか見ることができないにもかかわらず、強く心を揺さぶられた。

また、ネット上には、賛成派、反対派様々な意見が溢れているが、一方で、投票結果が出た直後、国民がこの結果によって二分することを望まないというメッセージや、賛成派・反対派がお互いが手を握り合う絵など、投票結果が戦争への賛成ではないという意思表示が盛んになされていた。

コロンビア国民は強く平和を望んでいる。誰もが、戦争のない世界を。ノーベル賞受賞によって、世界的な注目が再びこの国に注がれた。粘り強い交渉が望まれる。

メキシコ・ナルコ回廊をゆく 2016 その1

～行方不明者家族のたたかい～ 山本昭代

今年もまた、恒例となった夏休みのメキシコ訪問。今回も、8月下旬から3週間。ちょうどメキシコシティ・マラソンの時期にかかるので、ついでに(?)走ってきた。標高2200mの高地でのマラソンは息が切れるが、3年連続無事完走。それはさておき、今回訪れたのは、首都からバスで北東に3時間の世界遺産の街でもあるケタロと、首都の南西に位置するミチョアカン州。2回に分けて報告させていただきます。

メキシコでは、「麻薬戦争」と呼ばれる近年の暴力的な状況の中、増え続ける死者の数とともに、最近問題視されるようになってきたのが「行方不明者」である。その数は、政府発表のいちばん新しいものによれば、2007年から2015年12月までの間に2万7659人とされている。だが人権団体のなかには、失踪を警察などに届け出るのはごく一部で、実際の失踪者はその10倍にも上るのではないかと、とするとところもある。実際、行方不明者の家族が警察に訴え出ようとしても、残った家族にも危害を加えず、などと脅され、届け出ることすらできないケースが少なくない。拉致行方不明事件の多くに、警察や軍が関与しているのである。また、たとえ警察に捜査を依頼できたとしても、よほどの著名人の家族などでもない限り、警察はなかなか動いてくれないのだ。

行方知れずになった人を探すには、それぞれの家族が勇気を振り絞り、自力で行うしかないのが現状である。そのようななか、沈黙を破って当局に訴え、また同じ立場の家族らと連帯し、自ら棒やショベルを手に山や谷を巡り、せめて亡骸でもと愛しい家族の面影を探し求めて歩く人々の姿が、マスコミにも報道されるようになった。

「記憶の足跡」のインスタレーションを準備するアルフレドさん(左)



「記憶の足跡」プロジェクト

メキシコシティで訪れた彫刻家のアルフレド・カサノバさんは、「記憶の足跡」というプロジェクトを行っている。行方知れずになった家族メンバーを探して歩く人から履いていた靴をもらい受け、その靴底に、突然姿を消してしまった息子や娘などへの切ない思いを吐露する言葉を刻む。インスタレーションでは、言葉を刻んだ靴が天井から吊り下げられ、その下に版画にした靴底の文字が展示される。いつもと同じように出かけて行った息子や娘が、ある日突然帰ってこない。警察に行き、病院を巡り、友人知人を訪ねて回り、日に夜を継いでひたすら歩く。絶望しつつも、それでも、ある日ひょっこり帰ってくるのではないかと、というかすかな希望も捨てられない。吊り下げられた無数の、履きくたびれた靴の1足1足が、それぞれの家族の苦痛に満ちた日々を物語る。靴底には、例えば次のような言葉が刻まれている。

「私の名前はマリアナです。娘のエディス・マリマル・ガルシア・トレスを探しています。2014年8月4日、サカテカス州グアダルーペ市で行方不明になりました。どんなに歩き、どんなにく

たびれようがかまわない。お前を見つけるまで、私たちは探し続けるよ」

「私はロレンソ・フランシスコです。息子のレイス・アンヘル・フランシスコ・アルソラを探しています。息子は、2014年9月26日と27日、アヨツィナパ教員養成大学のほかの42人の学生とともに警察官らに連行され、以来行方不明になっています。息子よ、お前がどこにしようとも、私たちは探しているよ。お前の消息が何もわからないので心が痛む。ちゃんと食べているのか、眠れているのか、泣いているのか、そして何が起こったのか。お前の弟と両親が家で帰りを待っているよ」

「記憶の足跡」のなかには、2014年9月にゲレロ州イグアラ市で起きた43人の学生拉致行方不明事件の被害者家族から提供された靴も含まれている。

それにしても、行方不明者はなぜこれほど増えているのか？ その背景のひとつには、犯罪組織が殺人を行った場合、かつてのように遺体を放置するよりも、遺体を埋めたり、焼却したり、ときには強酸に漬けて溶かしたりして、犯行を隠すことが多くなったことがある。犯罪組織が支配する地域ではとくに、複数の遺体を埋めた秘密墓地があちこちで発見されている。

その一方で、警察当局の不作为の問題も深刻である。事件被害者の遺体が見つかって、警察は身元確認のために必要な作業を行わないまま放置していることもある。遺体のサンプル採取など、必要最低限のことすら行わないまま、身元不明者として共同墓地に葬っていたというスキャンダルも報道されている。そのように当局によって違法に埋葬された遺体は、全国で500体にもものぼるといわれる。

この膨大な数の行方不明者とその家族の悲劇は、この国に蔓延する暴力、汚職、司法の無能さ、そして罪を犯しても罰されない「不処罰」の風潮によって生み出されている。

アルフレッドさんらは、2017年3月から「記憶の足跡」のインスタレーションをヨーロッパ各地で行

う予定で、その後はアメリカ・ロサンゼルスにも招かれているとか。その次は日本で？ できたらいいけれど…。

世界遺産の街の失踪被害者

さて、8月30日は国連が定めた「強制失踪被害者国際デー」。このため、この日の前後にメキシコ各地で行方不明者家族の組織によるイベントが行われていた。そのひとつがケタラロであり、アルフレッドさんのインスタレーションも行われるということなので訪れてみた。

ケタラロは植民地時代の街並みが世界遺産に登録されている美しい街。近くのサン・ミゲル・デ・アジェンデほど有名ではないせいか比較的観光ずれしておらず、しかも驚かされるのがその清潔さ。中心街の街角にはゴミひとつ落ちておらず、スプレーの落書きも見当たらない。

ケタラロ市郊外には工業団地が造成され、日本の自動車産業をはじめ、国外からの投資も盛んで、メキシコ国内でも州の経済成長率はトップクラス。国内でも犯罪率の低い州で、2015年の調査によれば、全国で3番目に安全だとされている。それでも犯罪と無縁というわけではけっしてなく、また他の州に出かけて被害に遭ったというケースもある。実際に複数の麻薬密輸マフィアのグループが州内に存在し、州内のメキシコ石油公社のパイプラインから石油を不法に抜き取るグループもいるという。

ケタラロの歴史地区にある劇場で行われたこの日のイベントは、行方不明被害者である若者が属して



亡きサウル青年のビデオとともに演奏するバンドメンバー

いたロックバンドの新アルバム披露を兼ねたものだった。ドラマー担当だったその若者は、去年9月に行方不明になり、3カ月後に遺体となって発見された。開演時に地元の行方不明被害者の会の代表が挨拶し、バンドのオリジナル曲「Desaparición(行方不明)」という曲も発表された。明るくにぎやかなステージの背景には、不在のままとなった若者の写真や動画が投影され、音楽を愛した青年の面影がしのばれた。

亡くなった青年の両親から話を聞くことができた。

——25歳だったサウルは、バンドのドラマーとして活動するほか、ケーキショップの店員やインターネットのウェブデザイナーの仕事など、複数の仕事を掛け持ちする、明るく活発な青年だった。犯罪組織とも薬物とも無関係で、入れ墨もなく、家のなかの害虫を父親が殺そうとすると怒るような、やさしい心の持ち主だった。ちょうど昨年の子の誕生日の夜、電話がかかってきて、「すぐに帰る」と出て行ったきり、帰ってこなくなった。

翌日の夜、心配になった家族は警察に行ったが、3、4時間待たされた挙句、何の情報もなかった。それから家族や友人たちと、息子の写真入りのチラシを作って配り、毎日探し始めた。街の郊外にある長距離バスターミナルには、行方不明者を探す写真が張り出されている。それまでは他人事で関心もなかったが、自分たちも息子の写真を同じ場所に張った。母親は心労の



サウル青年(写真)を挟んで、両親と妹

あまり、食事ものどを通らなくなってしまった。父親は、捜索活動のために建設関係の仕事を辞めてしまった。一家の生活は一変してしまった。

1か月たってから、地元ケレタロで活動する行方不明被害者家族の会とコンタクトをとることができ、メキシコシティの検察庁まで同行してもらい告訴した。街頭の監視カメラの録画を見、また市警察の捜査担当者と一緒に、遺体が遺棄されていそうな場所を回って探した。

失踪してから3か月たった12月18日、それらしい遺体が見つかったと連絡があった。DNA鑑定などを経て、変わり果てた息子だと確認された。その後まもなく、犯人が逮捕された。金持ちの家の息子で、サウルと何かで口論になり、殺害に至ったらしい。まだ裁判の過程だが、犯人は犯行を認めているという。

同じ行方不明者の会には、何年も探し続けても見つからない人、また遺体が見つかったも犯人がわからないままの人もある。3カ月で見つかったわが家の場合は、それと比べるとまだいいといわれるかもしれない。しかし、そこからまた裁判という辛い体験も新たに始まり、息子を失った痛みはずっと続いている…。

サウル青年の両親が呼び掛けてくれ、地元の行方不明被害者家族の会のメンバーが私のために急きょ集まってくれた。そのなかのひとり、ソコロさんの話を紹介したい。

——2012年2月、教師として働く息子ライムンドは、友人と一緒に週末3日間の休みを取り、ベラクルス市に遊びに出かけて行った。帰る予定の日になっても連絡がないので、こちらから携帯電話に電話を入れると、知らない男の声で乱暴な言葉遣いの返事があった。電話は切れ、それきり通じなくなった。一緒に行った友人も帰宅せず、連絡もないので、その父親と一緒にベラクルス州に出向き、警察に届け、病院や役所を回り、消息を尋ねたが、足取りはまったくつ



かめなかった。まるで地面に吸い込まれたかのように、息子とその友人は消えてしまった。行方不明になるようなことは何も心当たりはなかった。

それから4年もたった今年1月、ベラクルス州の州都ハラパ市の遺体安置所に保管されていた遺体のひとつがライムンドだったことがようやく判明した。行方不明者捜索のための指紋照合システムによってである。友人の遺体は指紋では照合できなかったのですが、DNA鑑定を待たなければならなかったが、これものちに判明した。やろうと思えばすぐにできる、ごく簡単な作業にもかかわらず、4年もかかったのだ。それも、こちらからしつこいほど働きかけた結果である。

遺体が見つかったのはハラパ市の墓地のわきで、遺体には拷問された跡があり、無残にも首が切られていた。なぜそのようなことになったのか、犯人は誰かなど、何も情報はない。

息子が行方不明になって最初の2年間は、たったひとりで、息子とその友人を探し回り、ケレタロやベラクルスの役所や警察と喧嘩してきた。その後ようやくケレタロの行方不明被害者の会と知り合うことができた。今は自分の経験を生かして、ほかの行方不明者の家族をボランティアで助けている。

家族の会代表で弁護士のブレンダさんは、兄が5年前に市警察に連行されたまま行方不明になっている。行方不明者の写真入り横断幕を前に、それぞれ

⑤集まってくれた行方不明犠牲者家族の会の方たち ⑥コンサートの前に挨拶する行方不明被害者家族の会代表のブレンダさん

のケースを説明してくれた。白いリボンが付いているのは、遺体となって発見された人である。顔写真のほとんどは、10代から40代くらいまでの働き盛りの男性だが、若い女性の写真もある。ケレタロでは、5人の若者が同時に行方不明になったケースがあり、そのうちの1人は10代だった。未成年者が行方不明になった場合、重大案件として全国手配することになっている。しかし警察は仕事が増えるのを嫌がってか、手配を1日だけ出してすぐに取り下げってしまったという。

全国的にも、拉致行方不明事件の被害者の半分以上は20～40代が占め、約2割が19歳以下という調査結果が出ている。家族を担い、社会の未来を担うはずの若い人々が、理由もわからず姿を消し、家族は絶望の淵に追いやられてしまう。市民の安全を保障するはずの国家は、その責任を放棄しているだけでなく、むしろ被害を拡大させるほうに加担し、一方で事件をもみ消すことしかやっていないのだ。

国連はメキシコ政府に対して、拉致行方不明に関する法律の制定を急ぐよう勧告している。はたして実効性のある法律ができるのかどうか、法律が制定されてもそれで犠牲者が減るのか。国外からもメキシコの人権状況を見守っていく必要があるだろう。

コンドル作戦の傷跡

伊香祝子 (recom会員)

はじめに

コンドルは、南アメリカの高山に棲む猛禽類で、南米音楽ファンにはおなじみの野鳥。青い空に大きな翼を広げてゆうゆうと飛ぶ姿は魅力的だが、このコンドルの名を冠した作戦は、人びとの心に深い傷あとをのこしている。

ラテンアメリカの名もなき人びとの年代記者であるエドアルド・ガレーノは、ラテンアメリカ500年の歴史を語った『収奪された大地』（原著の初版は1971年。その後も版を重ねている）の新版への序文にこう記した。

1976年8月、チリのオルランド・レテリエルは論文を発表し、そのなかでピノチェト独裁制のテロと特権的小グループの「経済的自由」は同じメダルの裏表であると告発した。サルバドール・アジェンデ政府の閣僚であったレテリエルは、アメリカ合州国に亡命していた。そして、その後、ワシントンで車にダイナマイトを仕掛けられて死んだ。論文のなかでレテリエルは、価格を思いのままに玩ぶ独占体の支配下にあるチリのそのような経済のなかでの自由競争について語るのは馬鹿げており、本物の労働組合が非合法化され、賃金が軍事評議会の政令で決められる国で、労働者の権利に言及するのは笑止千万であると述べている。（大久保光夫訳、藤原書店、1997年より）

南米の三角錐部分、太平洋岸に細く伸びる国チリで、選挙によって成立したアジェンデ率いる人民連合政権は、1973年9月、軍によるクーデタで倒された。レテリエルは、アジェンデ政権下で駐米大使、外務・国務・防衛大臣などを歴任したが、クーデタの勃発後、12カ月間強制収容所で拘束されたのち、1974年9月に国外へ追放。1975年、ベネズエラのカラカスから、米国ワシントンDCに転居し、複数の研究所に籍をおきながら、ピノチェト政権の人権侵害

の状況を批判し、合衆国連邦議会や欧州各国の政府に陳情を行い続けた結果、同政権への借款（特に欧州諸国）の阻止に成功。上記の論文では、規制緩和や民営化などのピノチェト政権の経済政策を立案したシカゴ学派の経済学者（シカゴ・ボーイズ）に言及している。彼は1976年9月10日、法令によりチリ国籍を剥奪され、その月の21日、自動車爆弾によりアメリカ人の助手ロニ・モフィットと共に死亡した。

元中央情報局（CIA）工作員でチリ国家情報局（DINA）職員のマイケル・タウンリーやマヌエル・コントラス元DINA局長、同じく元DINA職員のペドロ・エスピノサ准将をはじめ、この事件で起訴、有罪判決を受けた者は多い。タウンリーは1978年米国にて殺人罪で有罪判決を受け62カ月間収監されたが、証人保護プログラムにより現在は自由の身である。コントラスやエスピノサも1993年にチリで有罪判決を受けている。なお、タウンリーが事件への連座を示唆したにも関わらず、2006年12月10日に死去したピノチェトは殺人罪で起訴されなかった。

（主にWikipediaの情報による）

このように国境を超えて反対派を追跡し暗殺する極秘のシステムがコンドル作戦（Operación Cóndor, Plan Cóndorとも）である。1970～80年代にかけチリ、ウルグアイ、アルゼンチン、ブラジル、パラグアイ、ボリビアの軍や警察の一部と秘密情報機関（これに準軍事組織や右派の活動家なども加わった）が相互に連携して、“反乱分子(subversivos)”[マルクス主義の活動家、組合活動家、学生、聖職者、ゲリラ、反体制派とかかわりを持ったと目される人びと（家族なども）]の情報を収集し、国外に逃げても法的な手続きを経ず本国へ送還できる仕組みを作り上げた。その多くが強制収容所で拷問・殺害され、また本国へ送還されてそのまま失踪した。

レテリエルのほかにも、ピノチェトの前任者・元陸軍総司令官カルロス・プラッツ將軍夫妻が、アルゼンチンの首都ブエノスアイレスで1974年に自動車

に仕掛けられた爆弾で殺害されたケース、ブラジルのジョアン・グラール元大統領（毒殺の疑い）、ボリビアの元大統領フアン・ホセ・トレス、ウルグアイの元下院議員エクトル・グティエレス・ルイス、同セルマル・ミチェリニ（いずれも1976年にアルゼンチン国内で死亡）、元チリ大統領エドゥアルド・フレイ（毒殺の疑い）などの犠牲者がいる。

コンドル作戦の背景とあらまし

パラグアイは、コンドル作戦に参加した6か国のなかで、最も長く1993年まで軍政が続いたが、国内に残る「恐怖のアーカイブス（Archivos del terror）」には各国のコンドル作戦の命令文書が保管されていた。それによると殺害された人が5万人、強制失踪3万人、投獄者は40万人にのぼる。また、コンドル作戦で培われた弾圧の手法などは、アルゼンチンの軍人によって、米政府の承認とCIAの協力のもと、中米（ホンジュラス、グアテマラ、ニカラグアの反共勢力）にも伝授された。

このような作戦が実行された背景には、冷戦構造のもとでの反共主義がラテンアメリカに及んだことがあげられる。1959年のキューバ革命の成功は、ラテンアメリカ社会に大きなインパクトをもたらした。1960年代には、キューバ革命を見習って、武力闘争による社会変革を目指す組織が各国で勢いづいたが、1965-66年までにほぼ壊滅された（小倉英敏著『ラテンアメリカ1968年論』新泉社、2015年）。しかし、1967年7月から8月にかけてハバナで開催された第一回ラテンアメリカ連帯機構

（OLAS）大会と「ボリビアでのゲバラの存在がラテンアメリカにおける再度の武力闘争路線の強化に影響を与え」、アルゼンチン、ブラジル、ウルグアイでは同年10月のゲバラの死に「逆に鼓舞された形で継続・拡大されることになった。（小倉、同書）そうしたなかで、チリにおいて選挙を通じて社会主義的な政策を行う人民連合政権が成立したことが、どれだけ近隣諸国の若者たちを刺激したかは想像に難くない。

そして、この人民連合政権が倒れた後、チリでは

反対派に対して激しい弾圧が行われた。クーデタ後の1年間で18万人が略式裁判により投獄され、その90%が拷問をうけていたという。隣国アルゼンチンでも、1974年2月に当時のフアン・ドミンゴ・ペロン大統領が「チリの極左主義者がアルゼンチンに亡命してきた場合に、これをとらえ法的手続きを無視して本国へ送還すること」また「国内の反乱者に対して（2カ国もしくはそれ以上の国々の）警察や軍が相互協力する仕組みの必要性」について語っていたことが記録されており、ペロンの死後後継者となったイサベル・ペロン政権下で、1976年3月のクーデタを待たず、すでに国内の左翼活動家の誘拐、失踪事件が起こっていた。

このような共通の思惑をもった2カ国と、軍政下にあったブラジル、パラグアイ、ボリビア、1970年代初めに都市ゲリラ、トゥパマロスを制圧したウルグアイの軍・秘密警察関係者が、1975年11月28日にチリのサンチアゴで交わした密約によりコンドル作戦が開始された。ペルーやエクアドル、コロンビア、ベネズエラも散発的に関与した。また、米国はコンドル作戦の要となる情報収集に、電子通信技術を提供するなどの支援を行っていた。2000年に公開されたCIAの資料によれば、1973年から77年までチリの国家情報局長官をつとめたマヌエル・コントレラスがCIAから情報提供の見返りに報酬も得ていたことがはっきりしている。そして、ニクソン政権の国家安全保障担当補佐官、フォード政権の国務長官をつとめたヘンリー・キッシンジャー（写真右、左はピノチェット）については、フランス、チリ、スペイン、アルゼンチンなど各国の裁判官が公式に証人喚



ピノチェットと握手するヘンリー・キッシンジャー

問を求めており、直接手を下してはいなくても、この作戦に関わっていたことは確実だと考えられている。

こうした一連の人道に対する犯罪は、各国の民政移管後、軍部の影響力の弱まりにともない、複数の裁判が行われている。コンドル作戦については、2013年から2016年にかけてアルゼンチン国内での100余名の失踪・殺害（うち9割がウルグアイ人などの外国人）についての裁判が行われ、18人の責任者に有罪判決が言い渡された。そのなかにはアルゼンチンの軍政時代の大統領レイナルド・ビニョーネ、ホルヘ・ビデラ（2013年没）の名前もあった。

取り戻された孫たち

ここからは、コンドル作戦の被害を思いがけない形で受けた若い世代の例を見てみたい。アルゼンチンの場合、1976年から83年の軍事政権時代の失踪者はおよそ3万人といわれるが、その多くは若者で、女性のなかには妊娠している人も含まれていた。そして強制収容所で出産された赤ん坊や、両親とともに誘拐された乳幼児などが、警察や軍の関係者、またはその仲介で無断で養子にだされた。

このような強制失踪者の母かつ祖母でもある女性たちの一部は、行方不明になった子どもや孫を探して1977年ごろから大統領官邸前の広場での静かな抗議活動を始め、5月広場の母たち/祖母たちとして広く知られるようになった。彼女たちはまた、行方不明者の家族から遺伝子情報の提供を受け、強制失踪者の子どもらしき人物が発見されたとき、近親者のデータをもとに、生物学上の両親との親子鑑定を行うための遺伝子バンクの創設を働きかけた。この仕組みを使って、現在までのところ120名の孫が取り戻されている（まだ消息のわからない孫たちも100人近くいるという）が、そのなかにコンドル作戦の犠牲者もいるのだ。

パブロ パブロの両親は、チリ出身で武装組織・左翼革命運動（MIR）の闘士であった。1974年3月にチリ当局の追及を逃れてアルゼンチン南部の州に脱



出したが、ここでも身の危険を感じ、1975年半ばにブエノスアイレスに移り住んだ。10月29日にパブロが誕生するが、翌年4月15日に滞在先のホテルから、家族三人が誘拐された。一家が連行された先は、オルレッティ・モーターズという修理工場＝写真＝を隠れみのとした、多くのコンドル作戦の犠牲者が拷問や殺害された収容所であった。その後の両親の行方はわかっていないが、パブロは1976年6月7日に、ある夫婦の実子として登録されている。

この夫婦のうち、夫は元連邦警察の警察官で、複数の政治犯の子どもをかってに養子縁組したかどで実刑に処された。妻もまた、パブロを実子として登録し育てたことで2015年12月に実刑判決を受けている。養父母への容疑が明らかになった2013年4月ごろ、「祖母たち」がパブロに接触し、調査の結果、彼が109番目の取り戻された孫であると確認され、チリに住む肉親ともつながることができた。だが、2015年4月、パブロは自室で遺体で見つかった。自殺だった。

マリアナ マリアナの両親はウルグアイ出身で左翼の活動家だったが、軍事政権(1973-)の追求をのがれて、アルゼンチンに脱出する。1975年3月にマリアナが誕生するが、1年半後一家は誘拐され、やはりオルレッティ収容所に連行される。マリアナは元情報局員の養子となってブエノスアイレスで暮らしていた。娘夫婦と孫の行方を探し続けた祖母は、養父母の所在を突き止めるが、一家は裁判所のDNA検査の命令を無視してマリアナを連れて逃亡、1991年発見される。その後、一度は祖母のもとへ帰ることを



マリアナの両親と赤ちゃんだったマリアナ

拒絶し、養父母と暮らすことを選んだマリアナだったが、現在は祖母を受け入れ、5月広場の祖母たちのプロモーションビデオ（“Nietos, Historias con Identidad” Youtubeで視聴可能）にも出演している。マリアナは、現在も、強制収容所で母が出産した妹か弟を探している。

マカレナ マカレナの両親は、1976年の8月、父親が20歳、母親が19歳で妊娠7カ月のとき、ブエノスアイレスの父の実家から誘拐された。父親はオルレティ収容所で殺害された。1991年に検視の結果確認された父の遺体は、首に銃弾を撃ち込まれ、ドラム缶にコンクリート詰めにしてサン・フェルナンド川の底に沈められていた。母親はウルグアイに連れて行かれ、1976年12月にマカレナを出産。彼女は、翌年1月モンテビデオのある警官の家のドアの前に置き去りにされた。母の行方はいまま不明だ。

マカレナの父方の祖父はジャーナリスト、詩人のファン・ヘルマンで、武装組織モントネーロスの機関紙の編集長をつとめていた。そのため、1975年に国を離れて以来1988年まで帰国できないまま、亡命先で軍事政権の人権侵害を告発し、自分の息子夫婦も含めた行方不明者たちの捜索を行い、国際世論に

働きかけていた。孫娘マカレナの所在が明らかになったのは、2000年になってからのことだった。

ひとつ補足しておく、「祖母たち」は生物学上の両親（につながる人たち）の存在を知った後の選択を「孫たち」自身にまかせている。だが、自分のルーツをしらないまま成長し、ある日突然それまでまったく知らなかった人たちが家族であると知らされ、場合によっては、それまで自分の家族だった人たちが罪に問われるのを目の当たりにするような状況を乗り越えなければならないのが、彼らの意思を超えたところにある現実だ。

おわりに

コンドル作戦の目的は、肉体的に反体制派やゲリラを抹殺することに加え、思想家や政治家などのリーダー的存在を暗殺し、精神的な恐怖により国民を支配することにあった。これにより国内政治は安定し、国外からの投資も経済発展も期待できる。チリではピノチェト政権下で、「チリの奇跡」（M・フリードマン）と称されるほどの経済的急成長をとげたが、一方で貧富の格差は増大した。40年前に暗殺されたオルランド・レテリエルの指摘どおりである。

プエルトリコの人気グループCalle13が「コンドル作戦は私の巣を侵した。私はゆるすが、けっして忘れない」（“Latinoamérica”の歌詞から）と歌ったように、このような事実をけっして忘れずに語り継ぐことが必要なのだろう。また、身近なところでも、経済的な繁栄のために個々の人間の尊厳が傷つけられていないか、感じ取る感性を大切にできればと思う。

参考文献（本文中で言及したものをのぞく）

Patrice McSherry “Los Estados depredadores: la Operación Cóndor y la guerra encubierta en América Latina” 2009年
寺尾隆吉編著『抵抗と亡命のスペイン語作家たち』洛北出版、2013年
アリエル・ドルフマン『ピノチェト将軍の信じがたく終わりなき裁判』宮下嶺夫訳、現代企画室、2006年
クリストファー・ヒッチンス『アメリカの陰謀とヘンリー・キッシンジャー』井上泰浩訳、集英社、2002年
現地メディア、Democracy Now、Wikipediaなど

現代に繋がる過去の凄惨な事件

2016年8月18日深夜、東京・赤坂のTBS放送で「荻上チキ・セッション22」というラジオ番組に1時間出演した。前日に電話で、リオデジャネイロ五輪期間中のいま、あまり取り上げられていないブラジル関連テーマとして「勝ち組・負け組」をやりたい、と伝えられていた。私はナビゲイター・チキの質問に答えて、日本人ブラジル移住の歴史から説明した。

ブラジルは1888年に奴隷制度を廃止した。日伯修好通商条約が1895年結ばれ、1908年6月18日、最初の移民781人が笠戸丸でサントス港から上陸した。私はブラジル駐在中の1988年6月、笠戸丸移民80周年記念行事をサントス、サンパウロ、ブラジリア、マナウス、ベレーン、リオで取材していた。その時の細かな仕込みの記憶が今回役立った。

ブラジルを植民地にしたポルトガルは奴隷貿易で大儲けしつつ、ブラジルに多くの奴隷を送り込んだ。先住民族を大虐殺し、アフリカ黒人を労働力として酷使した。ところが奴隷制度が御法度となったため、代替労働力を採さねばならず、東洋の日本人にも目を付けた。白人優越主義のポルトガル系を中心とする白人優越主義のブラジル政府は「黄色人種」を嫌いながらも、必要悪として導入した。こうして1923年までに日本人約24万がブラジルに移住した。石川達三の小説『蒼氓』（人民）には、渡航する移住者たちの移住船内での生態が細かく描かれている。「海外雄飛」の夢とは裏腹に、前途には「奴隷に代わる奴隷労働者」の運命が待ち受けていた。

日本政府はブラジルの人種差別主義を知っていた。このため日本人が排斥されないようにと、日本人を白人入植者と利害が衝突しないアマゾンなど辺境に送り込んだ。初期移住者が、サンパウロなど大都会から地方に行く鉄道で「何々線沿線の何処どこ」という表現をしたのも、僻地移住が主だったからだ。移民の多くはコーヒー農場労働者から生業を始めた。

人種差別主義のブラジル政府は、日本の朝鮮半島・中国大陸進出を警戒する米政府の意向と連動して1934年、「日本人は同化しない」として排日法を

制定、41年の日米開戦で移民は打ち切られた。ブラジルは42年、連合軍側から参戦、日本は敵性国になった。日系社会の指導者2300人がスパイ防止を理由に逮捕され、サントス港一帯からは6000人が収容所に送られ、資産を没収された。移住者の「新天地での飛躍」の夢は無残にも崩れ、絶望が支配した。

日本政府は沖縄人、被差別部落民、左翼、無政府主義者らを移民として出国させていた。日本の国内での差別主義が人種差別主義のブラジルに結び付いたのだ。沖縄人を含め日本本土で差別されていた人々には、「海外では同じ日本人と見なされ、差別されなくなる」との願望もあった。満州移民の場合にも同じことがあった。移民は、日本の貧しさ、人口過剰、食糧不足などから促進されたが、「厄介払い」も含まれていたのだ。また移民には、海外に日本政府の拠点を布石するという国家戦略もあった。

このような背景があって1945年8月15日、天皇ラジオ演説（玉音放送）がポツダム宣言受諾決定を発表した。次いで9月2日、米海軍戦艦上での日本降伏式が挙行された。ここからブラジル日系社会の悲劇が始まる。「玉音放送」は日系人の多くに伝わらなかった。伝わっても正確に理解されない場合が少なからずあった。日本の在外公館は既に引き揚げていて無く、確かめることもままならなかった。ポルトガル語でブラジル紙を読みこなし、現地のラジオ放送ニュースを聴きこなせる日系人は少なかった。頼りの邦字紙はどうに発禁となっていた。

日本では45年8月15日前後、厚木飛行場駐屯の航空隊などが「徹底抗戦」を掲げ、占領軍総司令官ダグラス・マッカーサー元帥の日本占領開始を危うくしかねない事態が起きていた。

日系社会の大多数は当然のことながら、戦時中は日本の勝戦を期待していた。だが1945年8～9月後、徐々に敗戦認識が広まりつつあった。状況を的確に把握していた日系社会の知識人らは連名で45年末、日本敗戦を知らしめる文書を配布した。彼らは敗戦を認識していたことから「認識派」と呼ばれた。この日系一部認識派エリートの行動が、敗戦について半信半疑だった一般日系人を動揺させ、移住者の中にいた、敗戦を認めたくない人々を激怒させた。天皇制軍国主義の教育によって鍛造されていた元軍

人らだった。

「勝ち組」は10万人に及び、その中核的指導者の立場にあった人々は極右「臣道連盟」に結集、認識派に対決してゆく。「天皇の臣下の取るべき道」は「徹底抗戦」であり、「裏切り者の成敗」だった。

1946年3月、元帝陸軍中佐らを指導者とする「臣道連盟」は最初の暗殺に出た。47年初めまでに109件発生、23人が暗殺された。負傷者は150人に及んだ。ブラジル政府は驚愕し、一斉取締りで500人を逮捕、うち80人を島流しにした。以上が「勝ち組・負け組」事件に至る移民史と同事件の概要である。

荻上チキは、番組開始前に、日高德一という90歳になるサンパウロ州マリリア市在住の移住一世を電話取材していた。46年6月、「認識派」の元軍人を殺害し、8年の懲役に服した経歴の持ち主だ。「勝ち組」唯一の襲撃犯の生存者である。日高は宮崎県延岡市出身。6歳だった1932年、家族に連れられて渡伯した。19歳で敗戦に直面した。チキは、電話インタビューを番組で流した。

「私は渡伯時、何も知らない6歳ぐらいの子どもだった。移民には日本で差別されていた人たちが左翼思想を持った人々も含まれていた。戦争になって日本の領事館などが去ってしまい、日本から捨てられたと感じた。8月15日の<玉音放送>は謀略だと思った。私は19歳から20歳になるころだったが、敗戦を信じなかった」

日系社会の認識派指導者らが連名書状で敗戦を知らせた。これにより、認識派でない者は、詰られ馬鹿にされ惨めな思いをした。「御真影」や日の丸をブラジル警察の面前で踏まされる「踏み絵」の屈辱にも遭った。踏まない者は取り調べられ逮捕された。「何も敗戦を書面で知らさなくても時間が経て

ば皆が敗戦を理解し受け入れるようになるはずだった」。なのに屈辱にまみれ我慢ならなくなった。

「殺害については言いたくないけれど、話そう。個人的な恨みなど全くない初対面だった相手の元日本軍大佐に自害するよう求め、拒否された。そこで仲間と発砲、射殺した。日本人として当時やるべきことをやったわけで、後悔していない」

私が最初に「勝ち組・負け組」問題をサンパウロで取材したのは1970年代初めだった。当時は事件から四半世紀しか経っておらず、タブーで、特に「勝ち組」の幹部だった人々から取材を拒否された。ある元「勝ち組」は、「東京五輪（1964年）のころ初めて日本に里帰りしたが、日本は発展していた。それ見ろ、戦争に勝ったから、これほどまでに豊かになっているのだと実感した。これをブラジルに戻ってから皆に話してやった」と私に言った。強がりだったにせよ、恐るべき詭弁だった。

「勝ち組」はある意味で、開戦・敗戦を導いた日本の国策および移民政策の犠牲者でもあったといえるだろう。メキシコの日系社会にもいたし、他の移住社会にもいた。だがブラジルのような凄惨な殺傷事件に発展することはなかった。無垢の日高少年はブラジル日系社会で軍国青年になり、暗殺者となった。戦前の日本の教育と精神が日系社会で拡大再生産されていたのだ。70年前の今頃、事件は続いていた。問答無用のファシズムだった。反知性、反論理、「死ねばもろとも主義」も支配する同一民族間のヘイト殺人であり、これは今日でも起こり得る。否、昨今の日本社会では既にヘイト大量殺人事件が起きている。真夜中の家路、タクシー車内でいろいろな思いをめぐらせた。実に久々に「臣道連盟」事件を考え、その高齢の加害生存者と声だけながら期せずして同じ番組に出たことに感慨があった。

ブラジル日本移民関連の書籍

「目でみるブラジル日本移民の百年(ブラジル日本移民百年史別巻)」2008年

ブラジル日本移民資料館(編集),ブラジル日本移民百周年記念協会百年史編纂委員会(編集) 風響社

「日系ブラジル移民文学1——日本語の長い旅」2012年 細川周平(著) みすず書房

「日系ブラジル移民文学2——日本語の長い旅」2013年 細川周平(著) みすず書房

「ブラジルの光、家族の風景:大原治雄写真集」2016年 大原治雄(著) サウダージ・ブックス

「忘れられない日本人移民 ブラジルへ渡った記録映像作家の旅」2013年 岡村淳(著) 港の人

「移り来て、今~ブラジル日系移住地に渡った人々の記録~」2016年 編者:山田史子(著) 文芸社

「サンバの国に演歌は流れる—音楽にみる日系ブラジル移民史(中公新書)1995年 細川周平(著) 中央公論社

「ブラジル日本移民—百年の軌跡—」2010年 丸山浩明(編集) 明石書店

「蒼氓の92年ブラジル移民の記録」2001年 内山勝男(著) 東京新聞出版局

「外務省が消した日本人—南米移民の半世紀」2001年 若槻泰雄(著) 毎日新聞社

「アマゾンからの手紙—10歳のブラジル移民」(風の文学館2) 2003年 山脇あさ子(著),宮崎耕平(イラスト)新日本出版社

サーニャで高まるアフロペルーの新たな試み

最近ペルーの北部にアフロペルー音楽のさまざまな新たな試みに挑戦している地域がある。それが今日お話しするサーニャだ。

そもそも、ペルーにおけるアフロ系が多く住んだ地域は大きく3つに分けられる。首都リマ、南部沿岸地方、そして北部沿岸地方である。

リマはもっとも多くのアフロ系人口を擁する地域として有名ではあるが、20世紀初頭には、他のクリオーヨたちとの文化融合の中ですでに多くのアフロ的文化を失っていたと言われる。もっともそれでも市井の生活の中にはさまざまな形でその断片は記憶されており、アフロ文化復興運動の中心人物ニコメデス・サンタ・クルスも母に背負われて聞いたアフロの子守唄の記憶などを語っている。

それに対して、かつて数多くのアシエンダ(農園)が経営され、奴隷が使われていた地方に残るアフロ集落には、より色濃くアフロ文化が残っていた。20世紀半ばにリマへと怒濤のごとく押し寄せた出稼ぎ移民の波の中で、こうしたアフロ文化が再発見されることとなる。リマへ移住したアフロ系住民で音楽家として成功した者の多くは、チンチャヤカニエテといった南部からの者が多い印象がある。こうした南部アフロ系の流入に呼応するように、リマ出身のアフロ系住民たちもアフロ文化復興運動へと参入していった。その意味で、今のアフロペルー音楽の中核をなしているのはリマと南部のアフロ系の人々であると言えるのかもしれない。

一方、北部のサーニャやモロポン、チュルカナスなどに点在するアフロ集落にもさまざまな音楽や踊り、祭りなどの伝統が残っており、それらの一部はメスティソたちの文化と融合しながら北部特有のトンデーロなどの踊りに受け継がれている。またカホンの原型ではないかとも言われるひょうたん打楽器や、アルパ(ハーブ)の胴をカホンのように叩くスタイルも北部には残っており、その文化的影響力は決

して無視できるものではない。にも関わらず北部のアフロ集落は、南部のチンチャなどのようにアフロペルー文化の故郷としてのイメージ作りには必ずしも成功しなかった。ところが近年、そんな北部が熱いのである。前置きが非常に長くなったが、そんな北部を代表するアフロ集落、サーニャをめぐる動きを少しご紹介したい。

サーニャには一度だけ訪れたことがある。もともと「サーニャ」という名前の古いアフロ系のルンデーロというスタイルの曲が好きだったことから気になっていた場所だった。加えて、お世話になったルイス・ロカ博士からアフロペルー博物館を建てたからぜひ行ってみなさいと言われたことがきっかけとなった。博物館を訪ねたのは2004年の4月末ごろだったが、アフロペルー博物館の公式データを見ると翌2005年3月に開館とあるので、実はまだ開館準備中だったのかもしれない。それでもそこで奴隷制時代のさまざまな奴隷用の拘束具や焼きごてなどを実際に目の当たりにしたり、さまざまな植民地時代や独立後のアフロ系を描いた絵や生活道具、さまざまな楽器、貴重なレコードのコレクションなども見せていただいた。ペルーを代表するアフロペルー研究者であるルイス・ロカ・トーレス博士が中心になって設立されたこのペルー初のアフロペルー博物館は、さまざまな企画をアフロ系アーティストたちと行っているようで、その成果がもしかしたらこのサーニャを中心とした北部アフロ文化リバイバルの大きな核となっているのかもしれない。

そもそもサーニャはニコメデス・サンタ・クルスも得意としたデシマと呼ばれる十行詩の即興詩人が数多く活躍した地の一つであり、今なお即興のデシミスタがいる地域でもある。ニコメデスは1960年、35歳の時に初めてサーニャを訪ねデシミスタたちと交友を温めている。私もサーニャを訪れたとき

には偶然知り合っただけで案内してくれた男の子が覚えているというデシマを朗唱してくれ、そんなものを聞かせてもらえると思ってもいなかったからびっくりしたのと同時にちょっと感動したものだ。またトンデーロのもととなったとも言われる古いアフロ音楽、ルンデーロ(サーニャ)と呼ばれる音楽が残っている地域でもある。

さらにチェコというカホンの原型とも言われる巨大なひょうたん楽器があるのもサーニャだ。このチェコは19世紀ごろから絵画に描かれていたり新聞記事などにも取り上げられていた。1979年にはアフロペルー文化リ

バイバル運動の立役者でもあるホセ・ドウラン教授のテレビ番組でチェコとアンガラが紹介されている。アンガラはピウラ県下で使われているこれまたカホン的ひょうたん打楽器の一種



だ。これらの楽器をサンボ・カベロとアベラルド・バスケスという当代随一のカホン奏者たちが演奏しているのを今ではYouTubeでも見ることが出来る。しかし、チェコはカホンに比べると音量も小さく繊細な楽器であるため、徐々にカホンに押されて使われることが減ってきつつあった。私はチクラヨでランバイエケ県の古い音楽を調査し演奏しているグループ「リャンパイェック」や「アルテ・エレンシア」がチェコを演奏しているのを聴いたことがあるが、当時はもう奏者が相当減ってしまっていると語っていた。

ところが2000年代半ば以降、ニコメデスの甥で打楽器奏者である故ラファエル・サンタ・クルスらも加わったチェコ復興プロジェクトが実を結んだのか、近年はサーニャを中心にチェコの復権が進んで



いる。さらにこうしたかつてのアフロ形の楽器を復興する動きはチェコだけにとどまらず、18世紀の民衆画家マルティネス・デ・コンパニオンが描き残したさまざまな打楽器の再構築がなされており、当時の絵そのままの楽器が作られいろいろ試行錯誤されているのを見るのは非常に心躍る風景でもある。

同時に、コンパニオンの残した絵画から、サーニャの悪魔舞踊も2011年に復興された。北部沿岸部には同じランバイエケ県下のトゥクメという町を中心にディアブリコという悪魔舞踊が残っているが、18世紀に描かれた悪魔舞踊の絵をもとに再構築されたサーニャのディアブリートは、悪魔の仮面をかぶって踊るわけだが、その中でものすごく巨大なお面をかぶった悪魔がいるのが特徴の一つだ(写真はアフロペルー博物館より)。そんな悪魔たちによって演じられるユーモラスな踊りであるが、悪魔舞踊と言ってもアルカンフェルなどの天使役も存在している。

また、チェコと時を同じくして、マリネラ・ノルテーニャの起源とされるバイレ・ティエラという踊りも再構築が始められている。チェコとギターで演奏されてきたというこの音楽も徐々にこれから耳にする機会が増えてくるかもしれない。

こうした試みの多くは、まだまだ発展途上だ。しかしこうした動きは、ペルーにはアフロ文化の豊かさな脈がまだまだ眠っていることを教えてくれる。目が離せないサーニャのアフロ文化復興のムーブメント。これだからペルー音楽はやめられないのだ。

鶏の手羽元のシチュー

POLLO EN CALDILLO

ソマリサの読者のみなさんこんにちは。はや10月。スープつきの食事がおいしい季節です。

今回も、簡単で栄養たっぷりな経済的なユカタン料理を紹介します。材料も簡単に手に入ります。

ユカタンでは鶏肉を大量に消費しており、無数の料理があります。はるか昔、アステカやマヤの人々は、ウズラやニワトリ、七面鳥、アヒル、ハトなどさまざまな野鳥を食べていました。

きょうの料理は鶏肉のシチューです。

子どものころ、私の母は、ニワトリやアヒル、七面鳥でたくさんの料理をつくってくれました。私たち兄弟も一緒に台所に立ち、中高生や大学生のころもよく手伝っていました。

七面鳥やアヒルの肉はスーパーマーケットでも売っていますが、多くの家で、生きた鳥を買ってきてさばいています。でもアヒルは21世紀になってずいぶん高価になってしまいました。

鶏肉のシチューは、1年に何度も食べました。母は、膨大なレシピを記憶していて、母が料理の作り方が載っている本や雑誌を読むのを見たことはありません。家にはその類いの本は1冊もありません



した。私たち兄弟は、母の料理を見たり手伝ったりしてユカタン料理を覚えました。

最初に述べたように、簡単で栄養たっぷりな経済的な料理なので、社会的地位に関係なく、金持ちも中間層も、農民も、またマヤの人々もこの料理を食べています。

この料理は、牛肉のコロッケのようなものでもつくことも可能ですが、今回は鶏肉を使います。

■材料 4人分

- ・鶏の手羽元 8本
- ・トマト中 3個
- ・タマネギ中 1/2
- ・ピーマン 3個
- ・水 15リットル
- ・粉末ニンニク 小さじ1杯
- ・コショウ・塩

■作り方

- 1) 手羽元肉を洗って深い鍋に入れる。
- 2) 水を入れて蓋をして、10~15分、強火にかける。
- 3) トマトを細かく刻む

- 4) ピーマンの種を取り出し、1センチ角に切る。
- 5) タマネギの皮をむき、ピーマンと同じ大きさに切る。
- 6) 鍋にトマトとピーマン、タマネギを入れて、ニンニクとコショウ、塩を加えてよく混ぜる。
- 7) 中火にして、蓋をしてさらに15分ほど煮込む。水が足りなければちょっとだけ加える。肉は十分やわらかくなるまで煮込むこと。
- 8) 深皿に最初に鶏肉をよそったあと、スープを入れ、コーンチップ3、4枚を上にあしらう。
- 9) ごはんやフランスパンといっしょにどうぞ。

エルサルバドル 恩赦法が違憲に、内戦中の人権侵害究明へ

1981年、エルサルバドル内戦中最大の虐殺事件が起こった。首都から200キロ東のエルモソテ村で千人余の住民が軍により虐殺されたものだ。生存者が1人だけおり、国際社会が知るところになったが、当時のエルサルバドル政府も、また同国に巨額の軍事援助をしていた米国政府も、この事件が起こったことも軍の責任も認めなかった。内戦が終わった92年にやっと遺体の発掘が行われた。その時492の遺体が発掘されたが、半分は子どもだった。その後さらに遺体が確認された。が、93年に恩赦法が制定されたため、事件の究明が阻まれていた。それから23年たった今年7月に最高裁判所が同法を違憲とする判断を下したことで、真相究明に道が開けた。今月から検察が捜査を始める。同時に裁判所は当時の軍高官5人を含む13人の軍人を裁判にかけようとした。このほかに、オスカル・ロメロ司教の暗殺や、イエズス会神父6人と女性2人の殺害事件などの内戦中の重大犯罪の究明も進むことが期待されている。また、行方不明者や死の部隊による殺害、ゲリラによる犯罪などにも光が当てられるだろう。エルサルバドルの内戦は12年におよび、この間に7万5000人が殺され、5000人が行方不明になった。内戦後、真相究明委員会は2万2000件の事件を調査し、85%が国軍と準軍事組織によるもので、5%がゲリラのファラブンド・マルティ民族解放戦線FMLNによるものとしている。(BBCMundo.com 14 julio 2016, 3 octubre 2016より)

メキシコ アテンコ事件でペーニャ・ニエト大統領の責任が明らかに？

2006年、メキシコ州のサンサルバドル・アテンコとテスココでデモをした人々を警官隊が襲い、2人が死亡、数百人が怪我をし、200人以上が逮捕され、24人の女性が警官から性的拷問を受けるという事件が起こった。警官隊の派遣を命じたのは当時の州知事で現大統領のエンリケ・ペーニャ・ニエトだった。メキシコ州政府がこの事件を調査する責任を果たさなかったということで、これが米州人権裁判所で裁かれることになった。米州人権委員会によると、女性らは警察から不当に逮捕され、性暴力を受けた。現在でも30人が裁判を受けないまま拘留されている。事件から10年経っても責任者も明らかになっていない。

問題は2001年、当時のフォックス大統領がメキシコ州に新しい空港を建設するため、共有地（エヒード）を接収しようとしたことに始まる。これに対し反対運動を起こした住民への弾圧があり、そのなかで女性たちが不法逮捕され、性的拷問を受けた。被害者らは事件を告発したが、当局により情報は操作され、検察もまともな捜査を行わなかった。国内での究明は不可能とみて、被害女性のうち11人が米州機構に提訴していた。(La Jornada Internet 2 de octubre de 2016, BBCMundo.com 29 septiembre 2016より)

ペルーの環境活動家にも身の危険

著名な環境賞、ゴールドマン賞を2002年に受賞したプエルトリコのアレクシス・ゴンサレスが、やはり同賞受賞者であるペルーの先住民環境活動家マクシマ・アクーニャとその家族が鉱山会社によって軟禁状態に置かれているとして、同国大統領宛にその安全と移動の自由を確保するよう要請した。アクーニャはこのために先月プエルトリコで開かれた「環境のために闘う女性たちのラテンアメリカ会議」に参加することができなかった。やはり同賞を受賞したホンジュラスの先住民環境活動家ベルタ・カセレスが殺害されて間もないが、裁判所が事件に関する資料を「紛失」する事態になり、事件の究明は遅れている。(desinformemonos.org 22 septiembre 2016より)

ハイチ ハリケーン・マシューの被害甚大

ここ10年で最大というハリケーンがハイチ、ドミニカ共和国、キューバを襲った。2010年の大地震からまだ回復していないハイチの被害は甚大で、10月12日現在で1000人の死者が出ている。家屋の倒壊などによる避難民も多い。農作物の被害も膨大で、飢餓の恐れと、コレラが再び猛威を振るうと危惧されている。

(Democracy Now! 2016/10/12より)

今年も東京・グローバルフェスタに出展しました。私が高校2年のとき初めてこのイベント（当時は国際協力フェスティバル）を訪れてから21年が経過しましたが、出展が269団体と大規模化した一方、その顔ぶれや雰囲気も変化してきたように感じました。NGOや国際協力機関だけでなく、企業や"自衛隊"の出展（出動？）など。ともかくも、名前からだとは活動地域やテーマがわかりづらい新しい元気な団体に囲まれながらも、"ラテンアメリカ"の看板を、現地から地理的には遠く離れた日本の地で、これからも掲げていく意義を再確認した2日間でした。（杉本唯史）

次回「そんりさ」印刷作業は東京で1月 日（土）、
 発送は関西で1月 日（土）の予定です。

参加いただける方は連絡ください

メーリングリスト 会員・購読者は無料で参加できます。

E-mail recom@jca.apc.orgまでアドレスを連絡ください

ホームページ <http://www.jca.apc.org/recom>

Vol.157 ニカラグア・ワスパンの今	Vol.153 コロンビアを伝える旅
Vol.156 グアテマラ戦時下性暴力裁判	Vol.152 グアテマラ視察報告
Vol.155 メキシコ・ナルコ街道ゲレロ	Vol.151 メキシコ・ナルコ回廊
Vol.154 グアテマラ揺るがす関税汚職	Vol.150 メキシコのアフリカ系

レコムに入会(もしくは購読)すると、メーリングリストにも無料で参加できます。入会したら、自己紹介メールを添えて recom@jca.apc.org までご一報を。登録します。レコムの活動は会員のみなさんによって支えられています。

☆郵便振替口座:00110-7-567396 日本ラテンアメリカ協力ネットワーク

☆会員 年 8000 円(学生 5000 円)...会の運営、総会での投票、『そんりさ』, 資料閲覧・貸出

☆賛助会員 年 10000 円(一口)...資料閲覧・貸し出し、『そんりさ』購読、総会への参加

☆『そんりさ』購読者 年 4000 円...『そんりさ』の購読、メーリングリスト参加可

レコム連絡先

〒 616-0004 京都市西京区嵐山中尾下町 20-15 太田方
 TEL 075-862-2556(留守電) お問い合わせは、E-MAIL・手紙も
 しくは留守番電話にメッセージをお願いします。

<レコム口座>

123万3520円

<グアテマラ基金>

48万9508円

(2016年10月現在)